

ベンガルのバウルの文化人類学的研究(3)

村 瀬 智

要 旨

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」とよばれる宗教的芸能集団の民族誌である。

詩人タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941) が、20世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」とみなされていたバウルの歌が再評価されるようになった。タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきの立派な歌集として出版された。また、バウルの歌を分析し、バウルの宗教を考察した専門書もいくつか出版された。もちろんこれらの研究は、バウルについてのわれわれの理解におおいに貢献したのであるが、そこには「人間としてのバウル」を専門的に紹介しようとした民族誌的文献は、事実上、皆無である。本研究は、バウルの民族誌的記述と分析を通じて、カースト制度と表裏の関係にある世捨ての制度を考察し、インド文明の構造的な理解を試みようとするものである。

キーワード：カースト、カースト制度、世捨て、マドゥコリ、ベンガル、バウル

目次

- I. 序論
- II. ベンガルのバウル：民族誌的記述
 - 1. バウルの道
 - 2. もうひとつのライフスタイル
 - 3. マドゥコリの生活
 - 4. 人間関係

5. 宗教生活

6. ベンガル社会の近代化とバウル

Ⅲ. 考察：世捨ての文化的意味

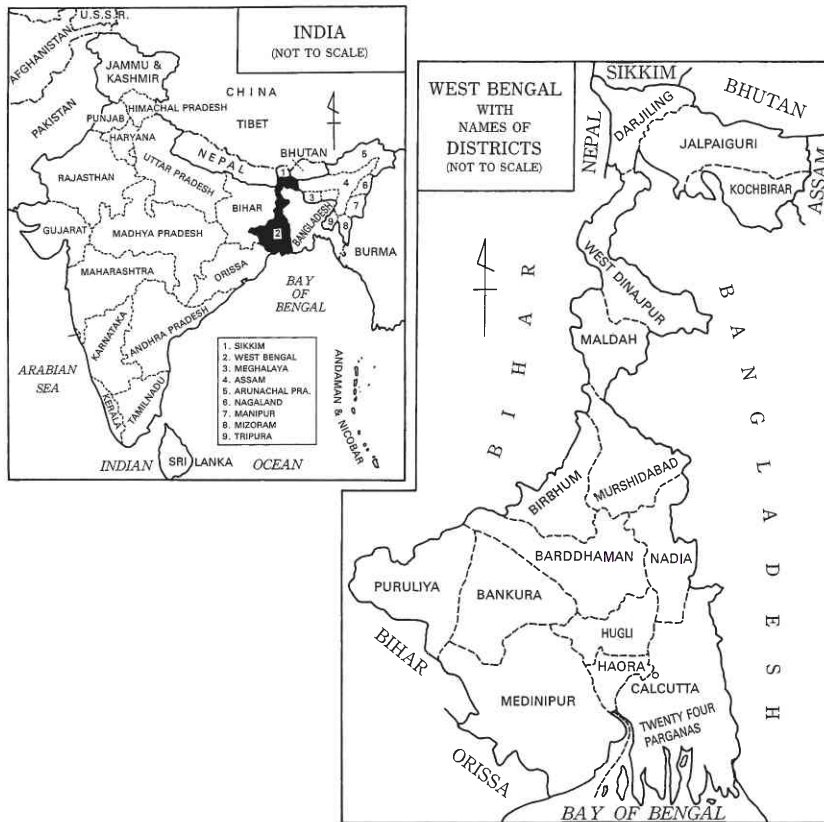
Ⅳ. 結論

本稿の前書き

本稿は、『大手前大学社会文化学部論集』第6号および『大手前大学論集』第8号に掲載された拙稿 [村瀬 2006: 331-349] [村瀬 2008: 171-188] のつづきである。本研究「ベンガルのバウルの文化人類学的研究」は、一連の研究であるので、前稿もあわせて読んでいただきたい。

注および参考文献は、本稿に該当する分のみを提示する。

読者の便宜のために、地図は本稿にも提示する。



地図1：インドおよび西ベンガル州

出典：Tourist Map of Bengal

Ⅱ. ベンガルのバウル：民族誌的記述（つづき）

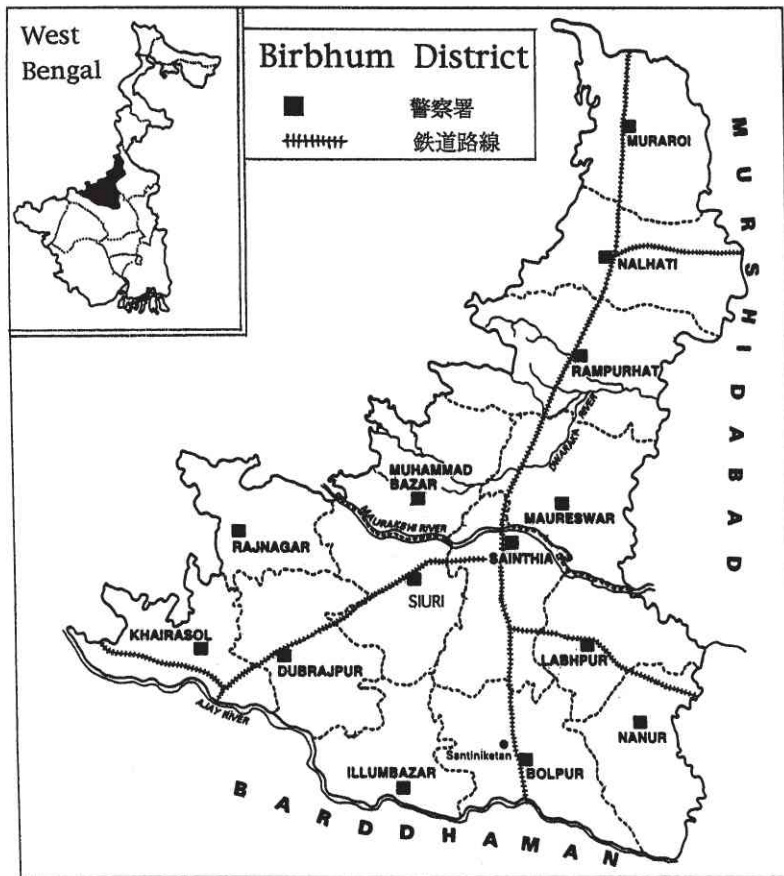
3. マドゥコリの生活

ベンガルのバウルは、農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などに、いっさい従事していない。彼らは、一般のベンガル人に経済的に依存し、「マドゥコリ」をして生活している。ベンガル語の辞書は、マドゥコリという語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物乞いをして歩くこと」と説明している。すなわち、ベンガルのバウルとは、「みずからバウルと名のり、バウルの衣装を身にまとい、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことである。バウルは宗教的な乞食なのである。彼らは、世捨て人のようなゲルア色（黄土色）または白色の衣装を着て、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのである。

3-1. マドゥコリの場と方法

バウルがどこでマドゥコリをするかは、バウルがどこに住んでいるかによる。バスや鉄道の路線から離れた辺ぴな村に住んでいるバウルにとっては、マドゥコリができるのは、歩いて行ける近所の村々にかぎられるだろう。それに比べ、バスの停留所に近い村に住むバウルは、少しは遠くまで行ける。彼らは、近所の村々だけでなく、バスで行ける村でもマドゥコリができるだろう。また鉄道の駅近くに住むバウルにとっては、行動範囲はさらに広がる。彼らは、列車で行ける村でマドゥコリができるだけでなく、列車のなかでも歌をうたって稼ぐことができるのである。

マドゥコリに行くのに便利だという理由からか、鉄道駅の周辺地区にはおおくのバウルが住んでいる。たとえば、わたしがフィールドワークをしていたとき、ボルプール・シャンティニケートン地域には16人のバウルがいたが、そのうち13人は、最寄りのボルプール駅あるいはプランティック駅まで歩いて10分以内の所に住んでいた（S地区8人、SP地区2人、UM地区2人、N地区1人）。



地図2：西ベンガル州ビルブム県

しかしながら、バウルにとっては、駅周辺であればどこでも住みやすいとはかぎらないようである。彼らが住んでいたのは、ボルプールのにぎやかな商業地域ではないし、シャンティニケートンの閑静な住宅街でもない。むしろそれらは、駅の裏側や町のはずれに位置し、まさに「中心」に対して「周縁」とよぶにふさわしい所である。「酒造りカーストの村」を意味するS地区の地名が示すように、そこの住民の大半はカースト身分の低い人たちである。一方、SP地区、UM地区、N地区は、1947年のインドとパキスタンの分離独立直後の混乱期に、政府によってつくられた難民村である。それらの村の住民のおおくは、肉体労働者か定職のない日雇い労働者である。もっとも、そのような難民村に住むバウルが、かならずしも東ベンガルからの移住者ではない。いずれにせよ、バウルにとって、駅近くのそれなりに住み心地のよい所は、地代や家賃がめっぽう安く、住民の出入りの激しい地区である。そのような地区だからこそ、バウルのような社会の中心からはずれた周縁的人間も容易に住みつことができたのだろう。

マドゥコリの場合は、女性のバウリニ（バウルの女性形）や子どものバウルには、田舎

の村よりも列車のなかのほうが好まれるようである。この理由は、バウルが受けとる喜捨の内容に関係するようだ。村では主として米や季節の野菜などの重くてかさばる「現物」なのに対し、列車のなかではもっぱら「現金」である。さらにアーマッドプール駅近くに住む女性のバウリニは、おおぜいの乗客がいる列車内の安全性を指摘した。

列車のなかで歌をうたって稼ぐことの最大の利点は、天候に左右されず、きびしい夏期や雨期にも容易に行えることである。しかし、この利点にもかかわらず、駅の近くに住むバウルのおおくは、列車のなかで歌をうたって稼ぐよりも、村でのマドゥコリを好むようである。その理由のひとつは、列車のなかは、いつもざわざわした雰囲気にあるからだ。バウルが歌をうたっているときも、さまざまな物売りが大声をはりあげて、混んだ車内をとおりすぎてゆく。そこは、演奏者のバウルにとっても、聴衆の乗客にとっても、十分な環境とはいえない。

もうひとつの理由は、そこでは、バウルが不特定多数の正体不明の乗客を相手に歌をうたわなければならないことにある。このことは、ボルプールのS地区に住むBDBの証言によくあらわれている。

「おおぜいの乗客のなかには喜捨をしたくない人もいますでしょう。それでもその人は人目を気にして、20パイサか25パイサの小銭を与えるでしょう。しかし、わたしがどこかの村のだれかの家の中庭でうたっている姿を想像してごらんください。そこには数人の聴衆しかいないけれど、彼らはわたしの歌をじっと聴いてくれる。そして、わたしの歌に満足した村びとは、ひと握りの米をよろこんで与えてくれます。それは、列車のなかの不本意な小銭よりもはるかにうれしい。」

バウルは、列車の無賃乗車を黙認されている。しかし、無賃乗車を黙認されているのはバウルだけではない。乞食や物売り、そして世捨て人も無賃乗車を黙認されているのである。

村でマドゥコリをするバウルは、経文を唱えて物乞いをするボイラギ（ヴィシュヌ派の出家修行者）やファッキール（イスラム神秘主義の行者）などと同様に、世捨て人の範ちゅうの人間である。しかし、列車のなかで歌をうたって稼ぐバウルを、乗客はどのようにみているのだろうか。バウルは小銭を求める乞食なのか。それとも、歌の押し売りをする物売りなのか。

バウルはマドゥコリをして生活しているのであるが、彼らのマドゥコリの仕方はさまざまである。大多数のバウルは、マドゥコリをするときは「いつも歌をうたう」という。しかし少数ではあるが、マドゥコリをするときは「神の御名を唱えるだけ」というバウルもいる。しかし、神の御名を唱えるだけというバウルも、村びとに歌を所望されれば、よろこんでバウルの歌をうたうという。

マドゥコリをするときは「いつも歌をうたう」というバウルと、「神の御名を唱える

だけ」というバウルとのちがいは、彼ら自身によるバウルの分類、すなわち「ガエク・バウル」と「サドク・バウル」にはほぼ対応しているようである。ガエク・バウルというのは、バウルの歌や音楽を演奏する「娯楽の提供者としてのバウル」である。一方、サドク・バウルというのは、サドナとよばれるバウルの宗教儀礼の実践に努力する「求道者としてのバウル」である。

バウルの歌は、その内容からみると、ふたつの種類に分類できる。ひとつは「ショブド・ガン」とよばれ、主として娯楽のために作られた「ことば遊びの歌」である。もうひとつは「トット・ガン」(タットヴァ・ガン)とよばれ、「バウルの宗教にもとづいた歌」である。しかし、バウルの宗教には秘密のことがらがおおいので、その秘密をうたいこんだトット・ガンには、しばしば「意図的な語句や表現」(サンダー・バッシヤ)が使用されている。つまり、トット・ガンには、表面上の意味の奥深くに隠された「真の意味」を表現するために、暗号のような語句や表現が意図的に使用されているのである。このためトット・ガンは、部外者にとっては難解で、いくつもの解釈が可能だったり、あるいは意味不明のことがおおい。その反面、部内者には「なぜ解き」をするようなおもしろさがあるといわれる。

マドゥコリをするときは「いつも歌をうたう」というガエク・バウルがうたうのは、ショブド・ガンである。そして、マドゥコリをするときは「神の御名を唱えるだけ」というサドク・バウルがよるこんでうたうのは、トット・ガンである。なぜなら、神の御名を唱えるだけのバウルに、わざわざ歌を所望する村びとは、バウルの歌や宗教に興味をもち、バウルの歌の「なぜ解き」をするようなおもしろさを知っているはずだからである。

3-2. 「10ルピー・バウル」

シャンティニケートンのSP地区に住むGDBは、自分のことを「10ルピー・バウル」とよぶ。これは、彼のマドゥコリによる稼ぎが、1日10ルピー程度だからであろう。

GDBはわたしの隣人のひとりだった。最初は挨拶をかわす程度だったが、わたしのベンガル語が上達するにつれて、彼はわたしの家に毎夕のように来るようになった。その理由は、彼がわたしの本棚にバウルの歌の主要な歌集がそろっているのをみつけたからである。彼は宝物を発見したように、気にいった歌をせっせと自分のノートブックに書き写した。こうして、彼のノートブックにはバウルの歌がどどんふえたのであるが、当時の彼は、バウルの宗教についての知識はとぼしかった。実際、彼には音楽上の「教師」はいたが、宗教上の「導師」はいなかった。彼は「ディッカ」(ディクシャー)とよばれる特定のグルへの入門式も、「シッカ」(シクシャー)とよばれる宗教的トレーニングも受けていなかったのである。

ところがしばらくすると、GDBは、パウルの宗教や儀礼について、しきりに知りたがるようになった。そして、わたしに質問してきた。この件については、わたしはたいへん用心ぶかく対処した。というのは、わたしはパウルの研究者であるが、わたし自身はパウルではないからである。わたしは、パウルの宗教や儀礼についての解説を、たとえ彼にできたとしても、けっしてしてはならないと自戒した。パウルの宗教や儀礼については、彼はほかのパウルから学ばねばならないと思ったからである。

しかし、わたしたちは毎夕の気楽な雑談をおたがいに楽しんだ。そして、友情をふかめていった。最終的には、彼はもっとも親密な友人のひとりとなった。いや、それ以上かもしれない。フィールドワークが最終段階にはいったころ、わたしは彼を、わたしのグルのアーシュラムに連れていった。わたしのグルに、彼を紹介したのである。こうしてわたしたちは、導師を共有する「キョウダイ弟子」(グル・パイ)となったのである。

3-3. 「10ルピー・パウル」のマドゥコリ活動

フィールドワークをはじめて間もないころ、わたしはマドゥコリに行くGDBに同行して、何度か村に出かけたことがあった。彼のマドゥコリのやり方についての資料を得たと思ったからだ。わたしの観察の一部はつぎのとおりである。

1987年10月17日 (土)

午前7時30分出発。彼の家から約5キロの距離にあるS村とL村へ徒歩で行く。彼は道中、それらの村で10軒の家を訪問する予定だと話す。しかし、実際には13軒の家を訪問した。なぜなら、予定外の3軒から歌をうたうように要請されたからである。13軒のうち、4軒では中に入れてもらえず、門口で歌をうたってマドゥコリをする。残り9軒では中庭に招き入れられ、ヤシの葉を編んだムシロ(タライ)または竹とヤシの葉で編んだ腰掛け(モラ)をだされる。中庭に招き入れられた9軒のうち、5軒でお茶とビスケットあるいはムリ(米をいった軽食)をふるまわれる。13軒の家を訪問したが、実際には19世帯から喜捨をうけた。なぜなら、何軒かの家は拡大家族で、複数の世帯から成立していたからである。この日にうけた喜捨は、米3キロ、季節の野菜2キロ、菓子2切れ、80パイサの現金。午後2時ごろ帰宅。

1987年10月20日 (火)

午前5時50分出発。プランティック駅から下り列車336号に乗車、ジャパテールダール駅で下車。駅から2キロの距離のJ村へ。J村では16軒の家を訪問する予定だったが、実際に訪問したのは10軒のみ。10軒には、予定外にリクエストされた2軒を含む。10軒のうち、3軒では戸口でマドゥコリする。残り7軒では中庭に入ることを許され、その

うち3軒からは、お茶とお菓子あるいはビスケットをふるまわれる。しかし、彼は10軒目でマドゥコリを中止する。その日は、カーリー・プジョ（カーリー女神の祭）の前日で、村びとは祭の準備で忙しそうだったからという。実際、10軒目の主婦は、いつもは彼を歓待するのに、その日は彼がうたい終わったとき忙しくてその場におらず、施与しそこねた。この日にうけた喜捨は、米2キロ、ジャガイモ500グラム、現金4ルピー。ジャパテルダール駅から上り列車329号に乗車、午前11時30分ごろ帰宅。

バウルになって7年目のGDBには、訪問したそれぞれの村で、彼の「パトロン」のような特定の家があるようである。もっとも、それらの家のすべてが、彼を中庭まで招き入れたわけではない。しかし彼は、それらの家とは何回かの訪問を通じて、それなりのよい関係をつくっていたのである。だからこそ訪問予定の家として数えることができたのである。彼はそのような特定の家を、どのように開拓したかを説明した。

「はじめての村では、いつもその村中の家を片っ端から訪ねるんだ。ひととおりマドゥコリがすんだあとで、どの家がわたしを受け入れてくれそうかを判断するんだ。そのあとは、年に2回か3回訪ねるだけだけれど、そのうちに顔なじみになるさ。」

GDBはさらに、村で彼を受け入れてくれるのは、金持ちよりも、むしろ社会的な身分の低い貧しい人たちである、と説明した。そのことは、べつにわたしを驚かせはしなかった。しかしわたしは、なぜ10月20日のような忙しい日に、バウルの歌を聴きたいと、わざわざ「使者」までよこした村びとがいたのだろうか、いぶかしく思った。

「村でマドゥコリをしている最中に、誰かから自分の家でも歌をうたってほしいとリクエストされることはあるのかい？」

「ああ、たまにはあるさ。わたしの歌をきいていた人から、ときどき頼まれることがあるよ。」

これはつまり、そのような聴衆は、GDBがどこかの家の中庭でうたっていたときに、偶然そこに居あわせた近所の人たちである。そして、その人たちもまた、マドゥコリをしている彼に、なにがしかの喜捨をしたいと思ったけれど、そのときに持ちあわせがなかったので、彼を自分の家まで招いて、もう一度うたってほしいと頼んだのである。しかし、わたしはまだ釈然としなかったので、ふたたび彼にたずねた。

「バウルの歌を聴きたいと、君に使者を送ってきた家で、いままでマドゥコリをしたことがあるのかい？」

「ああ、確かにあるはずさ。村をはじめて訪ねたときには、すべての家の戸口でマドゥコリをしているはずだからね。」

しかし、バウルの歌を聴きたいと彼に使者を送った家は、彼が訪問しようと予定していた16軒には含まれていなかった。

使者を送った家の人びとは、GDBを中庭まで招き入れた。門口で待っているつもりでいたわたしも、招き入れられた。その家は、一見して、かなりのお金持ちのようであった。そして、その家族の会話は、教養ある人にふさわしいものであった。彼らは、同行者であるわたしも丁重にもてなした。

GDBが3曲うたい終わったとき、お茶とお菓子が運ばれてきた。わたしは、それはしばらくの休憩で、お茶のあと彼の演奏が再開されるものと思っていた。しかし、その家の人びとは、パウルの歌をもっと聴きたいとは言わなかった。そのかわり、お盆に山盛りの米に2ルピーの現金をそえて彼に与えた。気前のよい施与に、GDBはよろこんでいた。しかしわたしには、その家の人たちは、パウとパウルの歌よりも、インド服を着てカタコトのベンガル語をあやつる、一風かわった外国人のほうに興味をもっているように感じられた。わたしは、自分がパウルのマドゥコリの邪魔をしているのかもしれない、と気づいた。それ以後、わたしはマドゥコリにでかける彼に同行するのをやめた。

マドゥコリにでかけるGDBに同行するのをやめたころ、わたしは、彼の日ごとのマドゥコリの行動を記録するようになった。毎夕の気楽な雑談を通じて、彼が「いつ」「どこで」「何を」「どれだけ」「どのようにして」稼いだかを、記録したのである。

GDBが「どこで」稼いだかについては、村や町の名前だけでなく、どのようにしてそこに行ったかも記録した。列車を利用した場合には、列車名も記録した。彼が「何を」「どれだけ」稼いだかについては、現金の場合はその額を、米や季節の野菜などの現物の場合にはその重量を記録した。彼の「重さ」を感知する能力は驚異的である。当初、わたしは秤にかけて確認していたが、誤差は5%以内だった。彼が「どのようにして」稼いだかについては、村や町でマドゥコリをしたのか、列車でうたって稼いだのか、演奏会にまねかれたのか、などを区別した。

しかし、フィールドワークに従事するわたしは、ときには数日にわたって外出することがあった。そのようなときは、出かける前に紙と鉛筆をGDBにわたして、わたしの留守中の、彼のマドゥコリの行動を書き留めておくように依頼した。彼は、わたしの意図を完全に理解していたと思う。

GDBが自分のことを「10ルピー・パウ」とよぶように、彼の稼ぎは、その日によって変動はあるものの、おおよそ1日に10ルピーである。次の表1は、1988年1月1日から12月31日までの、1年間の彼の稼ぎをまとめたものである。

方 法	日 数	収入 (ルピー)
村や町でのマドゥコリ	125	1445.80*
列車でうたって稼ぐ	64	615.70
村や町でのマドゥコリと列車での稼ぎ	13	215.00
祭りやメラへの参加	16	72.00
演奏会への参加	10	60.00
要請によりうたう	8	539.00
その他	25	280.00
休日	117	0
合 計	378**	3227.50

* コメや野菜などの現物は、市場価格に換算し、ルピーで表示した。

** マドゥコリをした日の夕方に、歌を要請された日などは、両方を1日と計算した。

表1：「10ルピー・パウル」の経済活動

3-4. 休日

ベンガル暦の新年は、ボイシャク月（4月中旬～5月中旬）からはじまる。それに先立つファルグン月（2月中旬～3月中旬）やチョイットロ月（3月中旬～4月中旬）は、サリーなど織物を売る店や、食料品店、薬屋などの商人が、なじみの客に来年のカレンダーを無料で配る月である。それらのカレンダーには、クリシュナとラダーヤ、シヴァやドゥルガー、カーリーなどのヒンドゥー教の神や女神か、あるいはチョイトンノやラーマクリシュナなどベンガル人になじみぶかい聖人の絵や写真が添えられているのが常である。それらのカレンダーは、わたしが知るかぎり、ベンガルのヒンドゥー教徒の家のもっとも重要な部屋の壁に、いくつも一緒にかけて飾られている。

フィールドワーク中、わたしは、ベンガル民衆の「ベンガルには、12ヵ月に13回のプジョがある」という、やや自嘲的な説明を何度もきいたことがある。「プジョ」というのは、ヒンドゥー教の祭や礼拝のことである。「13」という数字は、プジョの行なわれる回数をあらわすのではなく、「数えきれないほど多い」という意味である。実際、ベンガルでは1年を通じて頻繁にプジョが行なわれる。というのは、わたしが近所の商人からもらって、今も手元においているベンガル暦1395年（1988-89）の小さなカレンダーには、年間150のプジョの一覧表が載っているからである。もっと詳しいカレンダーかヒンドゥー占星術の年鑑を調べれば、ベンガルでは毎日プジョが行なわれているといっても過言ではないだろう。もちろんほとんどのベンガル人は、カレンダーに記載されたプジョのすべてを実行してはいない。しかし彼らは、カレンダーなしには日常生活を送ることができないのである。

パウルはそのようなプジョをけっして行なわない。しかし、彼らのマドゥコリの行動は、世俗のヒンドゥー教徒の日常生活に強く影響されている。なぜなら、パウルは経済

的に世俗のヒンドゥー教徒に依存しており、村びとに施しを乞いながら、なんとか生活しているからである。実際、GDBは、ベンガルの主要なプジョであるドゥルガー・プジョ（豊穡の女神ドゥルガーを礼拝するベンガル最大の秋祭り）やロッキ・プジョ（富と幸運の女神ラクシュミのプジョ）、カーリー・プジョ（創造と破壊の女神カーリーのプジョ）などの日には、休みをとった。彼は、村びとの邪魔をしたくないので、プジョの日にはマドゥコリに行かなかった、と説明した。しかし、わたしが1987年10月20日に観察したように、彼がそのような日に村に行けば歓迎されない訪問者となり、したがって、村びとの喜捨も少ないということを、経験的に気づいていたようである。彼がそのような主要なプジョの日に例外なく休みをとったのは、彼の宗教的な心情からではなく、経済的要因の結果なのである。

GDBは、1988年に合計117日の休みをとった。その理由はいくつかある。前述のように、彼は主要なプジョの日には休んだ。彼はときには病気で寝込んだし、妻の病気のせいでマドゥコリに行かない日もあった。また、嵐のために出かけることができない日もあった。それらはいずれももっともな理由である。しかし、より意味ありげなのは、彼が「毎週木曜日」に休みをとったことである。では、なぜ毎週木曜日に休んだのだろうか。

英語の「木曜日 (Thursday)」という語が、北欧神話の「雷神 (Thor) の日」に由来するように、インドの言葉で木曜日を意味する「ブリホシュポティ・パール」は、「ブリホシュポティの日」に由来する。「ブリホシュポティ」は、インド神話では「神々の導師 (グル)」とよばれている。このことは、ベンガル語では木曜日のことを、しばしば「グル・パール (導師の日)」とよぶので、よく理解できる。実際、おおくのバウルは、「木曜日にマドゥコリに行かないのは、その日はグルのことを心に思い、グルに感謝をささげる日であるから」と説明した。しかしわたしは、それならば、なぜ彼らは木曜日にグルのためにマドゥコリをしないのだろうかと、疑問に思った。

GDBも含めておおくのバウルが語った意見を総合すると、バウルが木曜日にマドゥコリに行かないのは、その日がマドゥコリには不吉な日とみなされているからである。このことは、ヒンドゥー占星術の教えと一致している。つまり、「木曜日のある時間は、いかなる労力に対してもまったく不吉」(ブリホシュポティル・バルベラ)とされているのである。だからバウルは、グルの日の木曜日にはグルに感謝しながら、一日静かに時を過ごさねばならないというわけである。

しかし、GDBが毎週木曜日に休みをとったことを、世俗のヒンドゥー教徒の視点から見ると、別の解釈ができそうである。ベンガルでは、木曜日はしばしば「ロッキ・パール (ラクシュミ女神の日)」ともよばれる。実際、ベンガルでは、富と幸運の女神ラクシュミは、家族の幸福を願う一家の女性によって、バラモン司祭者の助けをいっさい受

けずに、毎週木曜日に礼拝されるのである。世俗のヒンドゥー教徒によれば、木曜日というのは、人は自分のお金を無駄づかいせず、できるかぎり節約しなければならない日とされている。そして彼らは、木曜日の食事はいつも「ニラミス」(野菜だけの食事)だと述べるのである。このことは、ベンガルの肉や魚のバジャール(市場)が、木曜日には閉るという事実や、飲酒が比較的自由的な西ベンガル州の酒屋が、木曜日に閉店するという事実¹⁾に反映している。木曜日は、菜食と禁酒の日とされているのである。

いずれにせよ、ラクシュミ女神の日の木曜日は、世俗のヒンドゥー教徒にとって、酒をひかえ質素な食事をして生活費を節約する日であり、出費を押さえる木曜日は、世俗のヒンドゥー教徒が、乞食や世捨て人に施与をしたくないと思う日なのである。その結果として、木曜日はバウルは効率的に施しを集めることができない。このように、バウルの日々のマドゥコリの行動は、世俗のヒンドゥー教徒の日常生活のリズムに強く影響されているのである。GDBは、村びとのハレの日にはマドゥコリをしないという方法で、彼自身を村びとの生活のリズムに適応させているのだ。

3-5. メラ

祝祭を意味するいくつかのベンガル語のなかで、「メラ」という言葉は、ベンガル人にとって一種独特の響きをとまなうようである。メラとは「定期市」という意味である。しかし、ほとんどのメラは、ヒンドゥー教かイスラム教の聖地で開催され、その地の宗教的祭典と関係しているのがふつうである。そしてメラ開催中は、ベンガルの田舎の町や村から、メラの会場行き直通バスがひっきりなしに出る。地方の住人にとって、メラは絶好の買い物の機会となるだけでなく、楽しく待ち遠しい祭りなのである。

聖地で祭りやメラが開催されることと、ベンガルにおける巡礼のシステムとを結びつけているのは、周期的な農業暦である。世俗の人びとが聖地にやってくるのは、メラや祭りが開催されているときであり、その時期は、彼らの農閑期である。ベンガルの主要なメラや祭りは、秋の米の収穫が終り、もっとも気候のよい、霜期と冬に集中している。¹⁾

「ジョイデブ・メラ」は、バウルにとってもっとも重要なメラである。このメラは、オジョイ川北岸のビルプム県ジョイデブ・ケンドゥーリ村で開催され、毎年ポーシュ月(12月中旬～1月中旬)の最終日にはじまり、数日間つづく。

1) ベンガルの1年は、6つの季節(リトゥ)からなる。それらは、「グリッショカル」(夏)、「ボルシャカル」(雨期)、「ショロトゥカル」(秋)、「ヘモントカル」(霜期)、「シトゥカル」(冬)、「ボショントカル」(春)である。

ジョイデブ・ケンドゥーリ村は、12世紀の詩人ジャヤデーヴァ²⁾の生誕地として有名である。またこの村は、この詩人が経験した「奇跡」によりヴィシュヌ派の聖地となった。その奇跡とは、詩人ジャヤデーヴァがガンガー（ガンジス川）の女神に告げられて以来、ポーシュ月の最終日には、ガンガーの水は水系的につながりのないオジョイ川に流れ入ると信じられている。ふだんはひっそりとしたジョイデブ・ケンドゥーリ村は、聖なるガンガーの水で沐浴しようとあつまつた巡礼客であふれるのである。

GDBは、1988年の1年間に、合計7つのメラに出かけ、16日間滞在した。

「なぜメラに行くんだい」というわたしの質問に、彼は、「メラが好きなんだよ。メラに参加することは大きな喜びだし、そのわたしの喜びを、ほかの人たちと分かちあうことができるからね」と、こたえた。わたしはナンセンスな質問をしたのかもしれない。というのは、おおくのパウルが、GDBとまったくおなじことを、判で押ししたようにいうからである。たぶん、彼らのいうことは本当なのだろう。しかしわたしは、彼らがメラに出かけるときには、いつも多数の「安全ピン」を持参するのを見逃さなかった。しかし、パウルがメラに行くのに、なぜ多数の安全ピンが必要なのだろうかと思議に思った。

聖地の寺院やアーシュラム（道場）などの宗教施設に所属する僧侶や奉仕者は、「セバイタ」とよばれる。彼らの暮らしは、そこに流入する巡礼者の数と密接に結びついている。聖地にきた世俗の人びとは、寺院や宗教施設で、昔からの儀式をしきたりどおりに行ない、セバイタに、布施としてなにがしかの金銭をさしだす。パウルは聖地のセバイタではない。しかしパウルは、祭りやメラにやってきた世俗の人びとから、なにがしかの金銭をうけとる。

世俗の人びとと世捨て人との関係を考察するために、インドの聖地ではどこでも観察される「ドルソン現象」についてふれておかねばならない。ドルソン現象とは、ヒンドゥー教の聖者「サードゥー」に対する、世俗の人びとの態度の根拠となっている信仰形態である。「ドルソン」（ダルシャナ）という語は、「見ること」あるいは「知らせること」という意味である。ベンガル語の日常的な会話の文脈では、「ドルソンを得る」とは「ちらりと見ること」であり、「ドルソンを与える」とは「ちらっと姿を見せること」である。世俗の人びとにとっては、聖地を巡礼するサードゥーをちらっと見ることは、聖地の寺院に祀られた神像をちらっと見ることに相応するとされている。そして世俗の巡礼者は、敬けんなヒンドゥー教徒が神像を取り扱うのとおなじやり方で、サー

2) ジャヤデーヴァの代表作『ギータゴヴィンダ』（「牛飼いの歌」の意）は、牛飼いきりシュナとして化身したヴィシュヌ神と牧女ラダーとの官能的恋愛を主題とし、その背後には神と人間との対等な関係を暗示するものとして、神秘的意義が説かれている。古典サンスクリット文学の最後を飾る作品であると同時に、ベンガル地方に流行したヴィシュヌ派文学の先駆といわれている [田中 1992: 187] [横地 2001: 142-143]。

ドゥーに丁重に接しなければならないのである。

これは、「神は人類を救済するために、動物や人間の姿をとって地上にあらわれる」という、ヒンドゥー教の「化身（アヴァターラ）の思想」と関係があるだろう。ヴィシュヌ神の10の化身のひとりがクリシュナである。そしてベンガルでは、16世紀の熱狂的な宗教運動の指導者のチョイトンノは、クリシュナと恋人ラダーの化身だと信じられているのである。さらに、そのチョイトンノの化身とみなされている「本物のサードゥー」が、現代でもベンガルのあちこちに存在するのである。サードゥーの衣装を着た人が「本物」か「にせもの」かは、シヴァ神だけが知っているといわれる。そしてサードゥーたちが、しばしば彼らの同僚のことを「サギ師」や「ベテン師」だといって、たがいに相手を「にせもの」と非難しあっているにもかかわらず、世俗のヒンドゥー教徒のサードゥーに対する態度は変化していない。世俗の人びとにとって、サードゥーの衣装を着た人は、すべて「本物」のサードゥーなのである。そして世俗の人びとは、サードゥーに食べ物や金品を与えて世話をしなければならないのである。それは、「ドルソンを得た」ことに対する返礼である。しかしサードゥー自身は、「ドルソンを与える」ほかには、俗人に対して何の義務もないのである。

世俗のヒンドゥー教徒は、聖地巡礼に行くことを誓う。彼は寺院の神像やサードゥーの「ドルソンを得る」ために聖地に行き、そうすることによって、なんらかの宗教的利益を得ようとする。反対に、バウルは巡礼に行くこと誓いはしないし、ドルソンを得る必要もない。バウルが祭りやメラに行くのは、「ドルソンを与える」ためなのだ。

祭りやメラの開催中、あちこちの寺院やアーシュラムなどの宗教施設には、大きなテントが張られ、マイクやスピーカー付きの仮設の舞台が準備される。バウルは、そのような宗教施設に集まり、ただ歌ったり踊ったりするだけだ。そこは、バウルが、あたかも「狂人」という彼らの名前にふさわしく、大声で歌ったり、はげしく踊ったり、荒々しく叫んだりできる場所なのだ。

「モホトショブ」（宗教的大宴会）は、ベンガルのヴィシュヌ教徒が讃歌（キールタン）をうたい、共食をして霊的な親交を深める祭である。1988年のバンクーラ県の「シヨナムキ・モホトショブ」のある夜、わたしはアーシュラムの脇に張られた大きなテントの片隅にすわっていた。そして、メディニプール県出身の「大卒バウル³⁾」と話していた。突然、テントの中央にいたひとりの老人が立ちあがり、大声でうたい激しく踊りだした。地面に転がりまわるかと思えば、今度はとびあがり、そして今度はけいれんを起したように激しく身をよじる。彼の歌や踊りはたいそう激しかったので、ついに彼は気を失って地面に倒れてしまった。彼は死人のように、まったく動かなくなった。そ

3) 「大卒バウル」については、前稿の「事例6」を参照 [村瀬 2008: 184-185]。

の状態がしばらくつづいた。しかし、テントに居合わせた何人かの人が、ひざまずいた姿勢で彼に近づき、彼の足に触り、そしていま彼の足に触った自分の手のひらにキスをしたのである。この行為は、「プロナム」（足の塵を拝すること）といて、ヒンドゥー教徒の目上の人に対するもっとも丁寧な挨拶である。それは、わたしにとって、あまりに印象的なできごとだったので、あの倒れてしまった男はどこの誰かと、同席の「大卒パウル」にたずねた。彼は、尊敬の念にみちた笑顔で語った。

「彼がどこに住んでいるのかは知らない。たった今、彼はパゴール（狂気）となった。わたしは以前にも、あのようにうたい踊っている彼を見たことがある。人びとが彼のことを『ケパ・ババ（狂人）』とよんでいるのを聞いたことがある。」

倒れてしまった男の振舞は、ベンガルのボイシュナブ（ヴィシュヌ教徒）の作法を知らない人から見れば、まさに発狂した人のようだ。だが、彼は「ケパ・ババ」とよばれるにふさわしく振舞ったのである。ベンガルでは、より気狂いじみたしぐさのボイシュナブは、より神に近づいた人とみなされるのである。16世紀のベンガルの熱狂的な宗教運動の指導者チョイトンノの伝記には、彼がクリシュナを思慕するあまり狂気となったエピソードを満載している。狂気を意味する「ケパ」や「パゴール」という語は、パウルのあいだだけでなく、ベンガルではたいへん敬意のこもった言葉なのである。

ほとんどのパウルは、今日ではもはやケパ・ババのように振舞ったりはしない。しかし、世俗の巡礼者たちは、祭りの会場で激しくうたい踊ったあげく、気を失ってしまったケパ・ババに、パウルのイメージを容易に重ね合わせてしまうだろう。なぜなら、ベンガル人なら誰でも、「パウル」も「ケパ」も「パゴール」も、「狂気」を意味すると知っているからである。

パウルは、サードゥーのようなゲルア色の衣装を着て、つぎつぎと舞台にあらわれては、宗教的なパウルの歌にあわせて、いつもよりはいくぶん激しく踊る。パウルは、ちらっと姿を見せて、「ドルソンを与えている」のである。お気に入りのパウルの姿を見て、おおくの巡礼者は、パウルの衣装に少額紙幣を「安全ピン」でとめて祝儀を与える。これは、世俗の巡礼者にとっては、「ドルソンを得た」ことに対する返礼である。そして、その「安全ピン」は、パウルが持参したものである。パウルは、祭りやメラで「祝儀」がもらえると期待していたのである。

ジョイデブ・メラのような伝統のある大きなメラでは、毎年「メラ委員会」が組織される。委員会は、メラに出店する商人から出店料をあつめ、地元の商店から寄付を募り、メラの会場中に電灯を仮設したり、世俗の巡礼者のための案内所や医務室用のテントを張ったりする。収穫後の稲田もメラの会場になるからである。しかし、もっと大事なことは、委員会は米や野菜、燃料、テントに敷きつめるわら（藁）などを大量にあつめて、ジョイデブ・ケンドゥーリ村のすべての寺院やアーシュラムに供給することである。な

ぜなら、メラの時期だけにぎわうジョイデブ・ケンドゥーリには、ホテルやツーリスト・ロッジなどの宿泊施設がないからである。メラ開催中、寺院やアーシュラムに張られた大きなテントは、無料宿泊施設となるのである。寺院やアーシュラムのセバイタは、宿を求める人びとに対して寛大である。しかし彼らは、世俗の巡礼者には、寄付や布施をそれとなく求めることを、けっして忘れないだろう。

このように、メラ委員会は、ジョイデブ・ケンドゥーリというベンガルのひとつの宗教的中心地の経済に、大きな役割を果たしている。委員会のおかげで、メラ開催中、セバイタや商人はもちろん、世俗の巡礼者、それにサードゥーや乞食など、すべての人が、ほかの人から恩恵を受けている。バウルは、寺院やアーシュラムの無料宿泊施設を利用し、巡礼者からの祝儀を期待してメラに参加する。寺院やアーシュラムは、マイクやスピーカーをバウルに提供する。バウルもそれにこたえて、メラの雰囲気盛りあげる。バウルの歌と演奏は、メラ開催中、昼も夜も途切れることなしにつづく。バウルの歌や踊りで盛りあがった寺院やアーシュラムのテントには巡礼者があふれる。寺院やアーシュラムは、バウルの歌と音楽を売り物に、巡礼者を獲得するのである。

バウルは、ときには列車のなかで不本意な施しを受け、屈辱的な経験もする。しかし祭りやメラでは、世俗の巡礼者はバウルを尊敬し、バウルの歌をよるこんで聴き、いくつもの祝儀をよるこんでバウルに与えるのである。そこでは確かに、バウルと世俗の巡礼者は、たがいに大きな喜びを得、彼らの喜びをたがいに分かちあっているのである。

ヒンドゥー教徒が聖地巡礼に行くのは、主として農閑期であるように、現代の非宗教的な巡礼者ともいえる観光客が観光地にやってくるのは、主として気候がおだやかな季節である。「10ルピー・バウル」と自称するGDBは、詩人タゴールで有名なシャンティニケートンを訪れた外国人観光客や、遠来の客をもてなす近所の金持ちのベンガル人に請われて、ときどきバウルの歌をうたうことがある。そのようなとき、彼が受け取る金額は、ふだんのマドゥコリの1日の稼ぎにくらべてはるかに大きい。そしてそれは、一時的には彼の家庭を潤す。

反対に、人びとが観光に行くのを避ける夏期や雨期は、バウルにとっても、村へマドゥコリに行くのが困難な時期である。ベンガルの夏には、「ルー」とよばれる熱風が何日もつづく。手に触れるものは、すべて熱く感じられる。人びとは、日中は小さな窓やドアを閉め切り、厚い土壁に守られた部屋の床に水をまき、じっと室内に留まっている。雨期になれば、すこしは涼しくなる。しかし、雨期には時には川があふれ、道が流される。

GDBは、常々、列車のなかでうたって稼ぐよりも、村でマドゥコリをするほうが好きだという。それにもかかわらず、夏期や雨期には、列車のなかで稼ぐ回数が増える。その時期そこには、バウルという「商売がたき」がたくさんいるはずなのに。

4. 人間関係

この章では、パウル自身のあいだに存在している社会的な人間関係にもう少し接近してみよう。考察の対象となるパウルは、特定のグルに弟子入りを許され、入門したと明言するパウルである。

4-1. 師弟関係

パウルにとってもっとも重要な関係は、彼と彼の肉体に宿る「心の人」(モネル・マヌシュ)とよばれる神との関係である。その関係は内面的なものである。しかし、パウルにとって宗教的・社会的な意味でより重要なのは、この内面的な関係を仲介し反映する彼のグルとの関係である。弟子にとって、グルは宗教上の導師である。またグルは、日常生活上の助言者でもある。しかし、それ以上の存在とも考えられているのである。

「グルは神なり」という考えは、インドでは、出家者や在家者を問わず、幅広く承認されている観念である。このことは、グルの同義語として「グル・デブ」や「グル・タクル」がしばしば用いられることにも象徴的に表れている。「デブ」や「タクル」の単語としての意味は「神」である。弟子にとって、グルは「神のような存在」なのである。あるいは、グルは「神よりも有能な存在」とも思われているようである。このことは、15世紀初期の詩人で、ベンガルのバクティ(親愛)文学の先駆けとなった「チョンディダシュの物語」にも語られている。

チョンディダシュの物語というのは、バラモン階級出身のチョンディダシュと洗濯女ラミーとの愛の物語である。それはカースト規制の厳しかった当時のベンガルではスキャンダラスな事件だった。チョンディダシュは、一般の人たちからだけでなく、家族や親戚、同僚たちからも非難され、苦悩していた。しかし、チョンディダシュが崇拝する女神のバスリ⁴⁾は、「ラミーは、だれひとりとして教えることのできない真理をお前に教え、神でさえも導かないような無上の喜びにお前を導くだろう」と告げて、洗濯女ラミーに対する彼の愛に忠実であるように諭した、といわれている [Sen 1986: 115-135]。チョンディダシュにとって、洗濯女ラミーはグルであり、神よりも有能な存在なのである。

男性のパウルにとって、グルと弟子の関係は、父と息子の関係と同じだとされる。しかし、これはあくまでも「関係」のことであって、年齢差は重要ではない。グルと弟子が同世代のこともあるし、年下のグルが年上の弟子の「父」であることもありうるのである。

4) バスリは、シヴァの神妃ドゥルガーと同一視されているベンガルの女神。

この擬制親族関係は、ベンガル語の親族名称をともなってひろがってゆく。グルの妻(グルパトニ)は、弟子にとっては母のような存在である。したがって、弟子は彼女のことを「グル・マー(母)」とよぶ。グルを共有するキョウダイ弟子は「グル・バイ(兄弟)」や「グル・ボン(姉妹)」とよばれる。また、グルのアニ弟子は「グル・ジェター(伯父)」、グルのオトウト弟子は「グル・カカ(叔父)」とよばれるのである。

年輩のバウルによると、昔のグルは弟子をきびしく鍛えたようである。弟子は歌を習うために、グルのアーシュラムに頻繁に通い、そのたびに数日滞在するのが常だった。そして、弟子のアーシュラム通いは、グルが亡くなるまでつづくのである。

グルのアーシュラムに滞在中、弟子は午前中にマドゥコリに出かける。弟子に扶養家族がいる場合、弟子は稼いだものを二等分し、半分を師に与え、残りの半分を自分のものとするができる。食事の世話はグル・マーがしてくれる。しかし水汲み、まき割り、草むしりなどアーシュラムの力仕事はすべて弟子の仕事である。アーシュラムに牛がいる場合、牛の世話も弟子の仕事である。グルの使い走りなどの雑用もしなければならぬ。さらに、グルが水浴するときには、身体や足に油をぬり、マッサージをする。このような師に対する弟子の義務をすべておえて、やっと歌を1曲お願いすることができるのである。

グルのなかには、自分のアーシュラムをもたず、弟子の家を巡回して教える人もいる。その場合、グルは弟子の家に数日滞在する。その間、弟子はグルの身の回りの世話をしなければならないのである。

グルに対する重罪を「グルパーブ」という。とりわけ、「グルを殺すこと」(グルハッタ)、「グルの妻をかどわかすこと」(グルパトニ・ホロン)、「グルの妻と性交すること」(グルパトニ・ゴモン)は三大重罪で、それらは親殺しや近親相姦と同じとみなされているのである。

インド社会における師弟関係の重要性と、「グル・シッショ・シヨンバード」(グルと弟子の対話の記録⁵⁾)という伝統は、けっして過小評価すべきではない。

4-2. 三種のグル

先述したように、ベンガルのバウル派には、ふたつの基本的な通過儀礼が存在する。第1は、「バウル派への入門式」、あるいは「バウル派の特定のグルへの入門式」の「ディッカ」である。ディッカの通過儀礼を与えたグルは「ディッカ・グル」とよばれ

5) たとえば、インド古代の宗教哲学書「ウパニシャッド」は、グルと弟子の対話・問答のかたちを借りて著わされている。最古のウパニシャッド文献が成立したのは前800年頃であるが、その後も続々と作成され、もっとも新しいものは16世紀のものまである。ちなみに、「ウパニシャッド」という語は、「近くに座る」という意味である。

る。そして第2は、「世捨て人の身分への通過儀礼」の「ベック」である。ベックの通過儀礼を与えたグルは「ベック・グル」とよばれる。

ディッカのあと、「シッカ」とよばれる一連の宗教的トレーニングが行われることがあり、そのグルは「シッカ・グル」とよばれる。シッカ・グルは、ディッカ・グルと同一人物であってもよいし、別人であってもよい。また、複数のシッカ・グルをもってもよい。

4-3. ディッカ

特定のグルに入門を希望する弟子は、ディッカの前に、グルに入門の許可を求めなければならない。しかし、すんなりと許可されるとはかぎらない。場合によっては断られることもある。いずれにせよグルの許可を得て、はじめてディッカの通過儀礼が行なわれるのである。

グルがディッカで最初に行うことは、弟子の耳に「ディッカ・マントラ」を吹き込むことである。このディッカ・マントラによって、ふたりのあいだに師弟関係が成立するのである。そして、グルはさまざまなマントラを、つぎつぎと弟子の耳に吹き込む。各マントラの音節ごとに、弟子はグルのあとについて復唱する。弟子が最後のマントラの復唱を終えると、グルは弟子に、それらのマントラが弟子を生涯守護すると説明する。この説明によって、ふたりの師弟関係は、一生涯にわたるものであることが確認されるのである。

4-4. シッカ

「パウルの道」には4つの宗教的段階が存在する。すなわち、まず最初が「ストゥール（無知）の段階」、2番目が「プロボルトン（準備）の段階」、そして第3番目が「サドク（実践）の段階」である。このサドクの段階に入って、弟子はサドナの実践を許可される。そして弟子が、自分の肉体に住む「心の人」とよばれる神と合一し、神を実感したとき、最後の「シッディ（成就）の段階」に達するのである。

シッカ・グルの役目は、弟子を「ストゥールの段階」から「プロボルトンの段階」へと招き、「サドクの段階」へ導くことである。グルにとっても、弟子にとっても、とりわけ重要なのは「プロボルトンの段階」である。

最初のレッスンのとき、シッカ・グルは、まず弟子の耳に「シッカ・マントラ」を吹き込む。このシッカ・マントラによって、ふたりのあいだに師弟関係が成立し、一連の宗教的トレーニング（シッカ）が開始されるのである。そして弟子は、宗教的トレーニングを受けはじめたのであるから、「ストゥールの段階」から「プロボルトンの段階」へ自動的に進級するのである。

シッカ・グルは「プロボルトンの段階」で、バウルの歌を通じてバウルの宗教や儀礼を教えるだけではない。ヨーガの坐法や呼吸法なども教え、弟子を鍛えるのである。グルは弟子の指導に全力をつくす。しかし同時に、弟子は「自分の精神と肉体の開拓」に努力しなければならないのである。

この「プロボルトンの段階」におけるグルと弟子の関係は、全面的に信頼しあった人間と人間のぶつかりあいである。グルも弟子も自分をさらけ出さねばならない。そして、グルと弟子の間では、羞恥心や嫌悪感や恐怖心は禁物である。なぜならば、バウルのサドナには性的儀礼や、宇宙を構成する五粗大元素を人間の器官や分泌物にたとえておこなわれる儀礼などをともなうからである。

「プロボルトンの段階」における一連の宗教的トレーニングは、ときには数年間におよぶ。そしてグルは、彼の弟子がサドナの実践に成功すると確信したとき、「プロボルトンの段階」から「サドクの段階」への進級を許可するのである。

4-5. サドクとサディカ

「サドクの段階」への進級を許可された男性の弟子が独身者の場合、バウルのサドナを実践するために、彼には女性のパートナーの「サディカ」が必要となる。グルは弟子にサディカを探すようにと示唆する。そのとき、パートナーを探す基準として、しばしば先述の「チョンディダシュの物語」が語られる。つまり、パートナーとして不可触民の女性をすすめているのであるが、これは絶対的なルールではない。

弟子が女性パートナーを見つけると、グルの前で「首飾りと白檀のねり粉の贈呈式」(マラー・チャンダン)が行なわれる。贈呈式には、きめられた手順があるわけではない。彼は、彼女の首に彼の「首飾り」(マラー)をかけ、彼女は彼女のものを彼の首にかける。彼は、「白檀のねり粉」(チャンダン)で彼女の額に「印」(ティラク)をつけ、彼女が同じことを彼にする。それで終了である。そして彼らは、その日のうちに同居をはじめめる。

彼らは同居するようになったのであるが、それは結婚したという意味ではない。彼らは、たがいに尊敬しあう「サドク」(男性修習者)と「サディカ」(女性修習者)なのである。ベンガル語には、「スワミ」(夫)と「ストリ」(妻)という夫婦関係をしめす親族名称が存在するが、宗教的に上級段階に進級したバウルのあいだでは、それが否定されているのである。

われわれにとって衝撃的なのは、宗教的に上級段階に進んだバウルには、「子どもがない」という事実である。サドクとサディカの関係は、「夫」と「妻」ではなく、恋人同士の「ナエク」と「ナイカ」なのである。恋人同士のナエクとナイカの目的は、子どもをつくることではない。いやむしろ、子どもをつくってはいけないのである。

パウルのサドナの究極の目的は、ひと組の男女の結合を通じて、人間の肉体に宿る「心の人」とよばれる神と至福の合一を達成し、「ショホジ」を実感することである。ショホジを実感するとは、人間に本来的にそなわっている宇宙の原理を実感することである。このことについては、次章で詳述する。

4-6. ベック：夫婦関係の清算

「結婚した夫婦にとって、もっとも大切な義務は男子をもうけることだ」という考えは、インドではその歴史を通じて広く受け入れられている。このことは、現代のベンガルにおいても同様である。

フィールドワーク中、わたしはしばしば近所の村びとから結婚式に参列するようにと招待をうけた。わたしの観察によると、ヒンドゥー教徒の結婚式のクライマックスは、「新郎が新婦の髪の毛の分け目に朱色の粉で印をつける場面」(シンドゥール・ダン)である。

一連の神への奉納の儀礼のあと、新郎と新婦は聖火の北側に立つ。そして新郎は、ギー(精製バター)と水による清めの混合物を新婦の頭に振りかける。そのあと新郎は、新婦の髪の毛の分け目に朱色の粉で印をつけ、彼女のサリーの端を顔まで引き降ろす。この行為によって、夫は象徴的に妻の子宮に入り、家族の継承者となる息子を産むという目的のために、彼女の子宮の血液を活性化させるのである。彼女の額にはじめてこの朱色の印をつけ、ベールを引き降ろすことによって、夫は彼女を、彼の貞淑で誠実な生涯の妻とすることができるのである。これ以後、彼女は出産可能な既婚女性のシンボルとして、朱色の印を髪の毛の分け目につけ続けるのである。

もし夫が先に亡くなった場合、寡婦となった彼女は、この朱色の印を拭き去り、赤色の装身具をはずさなければならないのである。この行為によって、彼女は象徴的に彼女自身の生殖能力を不活発にするのである。そしてそれ以後、彼女は色物のサリーの着用をやめ、ヒンドゥー教徒の寡婦のシンボルとして、死ぬまで「白い衣装」(サダ・タン・カポール)を着用しなければならないのである。

それではパウルの場合はどうであろうか。特定のゲルに入門し、一連の宗教的トレーニングを受けたパウルのおおくは、彼らがディッカやシッカを受けた時点で、すでにマドゥコリの生活を採用し、パウルになっていた。そして、たいていの場合、彼らはすでに結婚していた。彼らの関係は「夫」と「妻」(「スワミ」と「ストリ」)だったのである。結果として、彼らがディッカやシッカを受けたとき、彼らにはすでに「子どもがいた」のである。しかし、わたしの資料によると、彼らのおおくは夫婦そろってディッカやシッカを受けていた。そして、ふたりそろって「サドク」と「サディカ」になっていたのである。

それでは彼らは、彼らの夫婦関係をどのようにして清算し、サドクとサディカになっ

たのであろうか。ビルブム県のランプールハートに住む43歳のNDBは次のように語った。

「わたしは16歳で結婚しました。彼女はそのとき14歳でした。私たちの結婚は、双方の親によって取り決められました。間もなく、わたしたちには息子と娘が生まれました。わたしが21歳のとき、ひとりの人目をひくバウルに出会いました。SGBのことです。彼はバンクーラ県出身で、ランプールハートから東に8キロのT村に定住したばかりでした。彼の語ったすべての言葉に、わたしは深い感銘をうけました。わたしは、彼こそがわたしの探していたグルだ、と思いました。わたしは彼に弟子にしてほしいとお願いしました。こうして、わたしは妻と一緒に、彼からディッカとシッカを受けました。ある日、彼は私たちに、「君たちにはすでに息子と娘が生まれたのであるから、君たちには両親としての責任がある。しかし、バウルの道を追求したいと願う君たちは、夫と妻である必要はない」と語りました。私たちはグルの助言に従いベックを受けました。わたしは彼から、新しい「ドリ・コウピン」(ふんどし)を受け取りました。それ以来、彼女は額の朱色の印を拭い去り、腕輪などの装身具をはずしました。私たちは、夫と妻の関係を清算し、サドクとサディカになったのです。それ以後、わたしたちには子どもが生まれていません。」

NDBの語りに、すこし補足が必要だろう。NDBと彼の妻にとって、ディッカ・グルとシッカ・グル、ベック・グルは同一人物である。NDBと彼の妻は、ディッカを受け、一連の宗教的トレーニング(シッカ)をうけはじめたので、彼らは「ストウールの段階」から「プロボルトンの段階」へと自動的に進級した。彼らは、バウルの歌を通じてバウルの宗教や儀礼を学んだ。さらにNDBは、ヨーガの修行を通じて自己鍛練にはげんだ。ヨーガの修行は、とくに男性の弟子にとっては重要である。そしてグルは、NDBと彼の妻がサドナの実践に成功すると確信したので、「サドクの段階」への進級を許可したのである。彼らは、「サドク」と「サディカ」になるために、ベックの通過儀礼をうけたのである。ベックは「世捨て人の身分への通過儀礼」である。しかしこの儀礼によって、NDBはヨーガ行者のシンボルである「ドリ・コウピン」を受けとり、彼の妻は既婚女性のシンボルである「額の朱色の印」を拭い去ったのである。彼女は象徴的に彼女自身の生殖能力を不活発にしたのである。そして彼女は、腕輪などの装身具をはずし、多色のサリーの着用をやめ、「ゲルア色(黄土色)」の衣装を着用したのである。ゲルア色の衣装は、ヒンドゥー社会では世捨て人のシンボルである。この儀礼によって、彼らは「世捨て人」として生まれ変わっただけでなく、「夫」と「妻」という彼らの以前の属性をも失い、「サドク」と「サディカ」として生まれ変わったのである。ベックの通過儀礼は、「世捨て人の身分への通過儀礼」であると同時に、「夫婦関係清算の儀礼」でもあるのである。

参考文献

村瀬 智

2006 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究 (1)」『大手前大学社会文化学部論集』第6号、331-349頁。

2008 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究 (2)」『大手前大学論集』第8号、171-188頁。

Sen, Dinesh Chandra

1986 *History of Bengali Language and Literature*. (Reprint Edition.) Delhi: Gian Publishing House.

田中於菟弥

1992 「ギータゴーヴィンダ」『南アジアを知る事典』187頁、平凡社。

横地優子

2001 「ギータ・ゴーヴィンダ 人は神をどれだけ愛せるか」『週刊朝日百科 世界の文学 115』142-143頁、朝日新聞社。